

---

## 53話 ブラボーライト

吉川明人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

53話 ブラボーライト

### 【Nコード】

N4041K

### 【作者名】

吉川明人

### 【あらすじ】

ショートショートです。ある日、友人から呼び出されとてつものくいい香りがするという薬品を嗅がされて……

できるだけ広い外で会いたいと、友人から妙な連絡があり、近所のグラウンドで待ち合わせることになった。

約束どおり来てみると、彼はすでに来ている。

「おう。来たぞ」

「待ってたよ。実はとてもいい香りだけど、3息吸ったら失明する薬が開発されたんだよ。

本当は香水として作られたんだけど、ものがものに軍が正式に採用して化学兵器になってしまった。

だけど、これを作った調香師は自分が失明しながらも「あの香りは本当に素晴らしいかった。

失明のリスクさえなければ全世界で愛されただろう」と言っている。

ここまで言わせる香りって、どんな素晴らしい香りなのか興味わくよね？」

いきなりまくしたてられても、理解できない。

なんだ？　すごくいいニオイだが失明する薬がある？

またずいぶんと物騒なモンだな……。

「そりゃあ少しは気になるが、失明するんだろ？」

「もちろん。軍が採用した化学兵器だからね。で……これがその香

水。

愛称は『ブラボーライト』」

ポケットから小さな小ビンを取り出した。

「……はあ？ うお！ 何でそんなもん持ってるんだ！？」

「配合が分かったから作ってみたんだよ」

「分かったからって、普通は作らないだろう！」

「作ってしまったんだよね。で、どう？」

「どうって……何がだ？」

「素晴らしい香りだったよ」

「吸ったのか！？」

「吸わないと香りが分からないよ。どう？」

「……俺にも吸ってみろってことだな」

「もしよければ、だけどね。君が断るならこの場で無毒化するけど、ちよっと誰かと感激を共有してみたいんだ」

「それほか？」

「失明のリスクさえなければ……いや、中には失明してもいいから

吸ってみたい人もいるんじゃないかな」

「……少し、ただだぞ」

「うん。だけど注意してね」

少しフタの開けられた小ビンを、言われたとおり注意しながらそつと手で香りを送り込むと……。

………ほわああああ。

気がつくともフタを押さえられていた。

「………い、いい、香りだなあ……」

「うん。だから誰かと共有してみたい気分だった」

「分かるぞ！ これはスゴイ！！ もし発売されてたら絶対買っぞ！！ あー誰かに勧めてみてえ！

だけど、これからそれどうするんだ？ どこかに捨てるわけにもいかないだろ」

「大丈夫。もう一つ、この袋の粉と混ぜ合わすと完全に無毒化する………もったいないけど、これ以上嗅がすわけにはいかないからね」

小ビンごと袋の中に入れて封をし、外からビンのフタを開けて、  
うす黄色の粉と混ぜる。

「それでもう害はないのか？」

「うん。害どころか、無毒化したこの液体は視神経の働きを活性化  
する。」

つまり眼の働きを良くするんだ。

将来、眼の治療に飛躍的な発展をもたらすかも知れないんだよ。

だから研究が表に出て、無毒化されたものありきで研究が始まっ  
たんだ。

オレがこんなもの持つてるのは、その関係者から相談を受けたか  
らだよ」

「そうだったのか。しかしぜんぜん反対方向だが、薬になるんなら  
いい話じゃないか」

「ところが、1つ問題が残ったんだ。それでみんな頭を悩ませてる。  
実は、この無毒化した液体の二オイがとてつもなくクサイんだ」

「とてつもない？ どれくらいだ」

「嗅いでみれば解るけど、どう？」

小ビンを出した時と同じく、袋を差し出す。

「……嗅げってことか？」

「もちろん無理強いはしない。ただ、興味があればのことだけど」

「そこまで言われると気になるな」

「嗅ぐなら絶対オレより風下に行つてね」

「……やっぱりイヤだ！　そこまで言われるほどオソロシイものなんて嗅ぎたくねえ」

「そう、残念かな。ちょっと誰かと共有したかったほどの衝撃だったのに」

「衝撃か！」

「……とは言うものの、それほどのニオイってのはどれほどのものなんだろう？」

イヤ過ぎて気になるやつかいな好奇心がわいてきた。  
さっきの小ビンの香りは本当にいい香りだった。

まさかあれがそこまで言うほどのニオイになるとは思えない。  
大げさに言ってるんじゃないか……。

「……ちょっと、嗅いでみてもいいぞ」

「そう？　無理しなくていいんだよ」

「いや、なんだか嗅ぎたくなってきたんだ」

「そこまで言うなら……」

「ああ……っ！ 渡したとたん全力でダッシュして逃げやがった！  
！ ……いよいよ気になるな」

俺はそつと袋の口を開いて……

「ギッ！……！ グッ、ぐきゃ！ わあああああ！……！」

あわてて袋の口を閉じて投げ出したが、しぶきが1滴顔に跳ねて、手で拭いたらよけいに面積を広げてしまった！

「な、なん……ゲホゲホ！ おおおうっ！……！ なんだ、こ……ゲホオエ！」

想像を絶する、ニオイとか悪臭とかのレベルじゃねえ！

魔物だ、鼻の中に魔物がいる！！  
顔と手には魔物がへばりついてやがる！！！！

水道！

洗い落すんだ!!

グラウンドのすみの洗い場へ駆け込んでバシャバシャ流しても、  
石鹸でいくらこすってもニオイが落ちない。

やばい!

やばいつ!!

助けて!!!!

たすけてくれ!!!!

タスケテクレエ!!!!

「……で、そんな時にはこれをかける」

セリフと同時に顔にスプレーがかけられる。

「……あ、ああ……消えた……消えたああ！！！」

膝から下の力がなくなり、ガツクリしやがみこんだ。

ニオイから解放され、心の底から嬉しかった。

気がつけば涙をボロボロ流している。

……が、しかし、

「コラッ！　なんてモン嗅がせてくれたんだ……って、お前は何度も確認したし、確かに俺から嗅ぎたいって言ったが……」

「衝撃だったよね」

「衝撃どころじゃねえ！　死ぬと思ったぞ！  
何なんだあのニオイは？」

手当たりしだいに臭いモンかき集めて、そこら中の腐ったモン放り込んでさらに発酵させてからあらゆる化学薬品ぶち込んだようないや、それでもまだ言い足りねえ」

「これまで発見されなかった、まったく新しい分子が作られるんだ。不思議だよな。とてもいい香りがすると光が奪われて、とんでもないニオイだと眼の神経を活性化させるなんて」

「まったく……」

「このニオイをなんとか出来ないかって相談されたんだ。

さっきスプレーしたのがニオイだけは抑えてくれる薬だよ。

昨日出来たばかりのた試作品でね」

「俺が実験台なのか」

「実験はもう済ませてるよ。ただ君と2つの香りの感激と衝撃を共有したいと思ってね。

香りだけは嗅ぐけど、あれほど注意されてニオイまで嗅ぐと思う人は少ないし、失明や失神されても困るから」

「そりゃあそうだろうな……」

「ニオイを抑える方法を相談されたとき、オレは薬の効果と無毒化後の効能を詳しく知るために確かめたんだ。

人間と動物では体内に入った時の反応が違うからいつも自分の身体を使うんだけど、今回は後悔したよ。

オレは無毒化したものを目薬のように1滴ずつ挿したんだ。

大変だったよ。

涙って鼻涙管を通して鼻に抜けるんだよね。

死んだほうがマシなんてオレは絶対に思わないと思ってたんだけど……。

おかげで全身にあのニオイが染み付いて、さっきのスプレーが完成するまでここ1週間、ずっと実験室から出られなかったんだ。命に関わらないのに、これほどせっぱ詰まって研究したのって初めてだ。面白かったよ」

「面白かったのかよ!？」

「ところで、気づいているかな？」

「何がだ？」

「これ、かけてないよね」

手に見覚えのあるメガネがあつた。

「あつ！ それ俺のメガネじゃないか……あれ？」

そう言えばさっきニオイを洗い流そうとして洗い場で外した覚えがあるが、なんで俺がメガネなしで見えているんだ？

「かけていないことに気づかなかった、とニヤニヤしながら俺を見やがる。」

「いや、ニオイが消えたほうが嬉しかっただけで……」

特注のレンズでしかも矯正できない視力しかない俺自身が、今一番驚いている。

「君が協力してくれるなら、ニオイを嗅ぐにもどのくらいの量をどの濃さで嗅ぐかの実験が出来るんだけどな……やっぱりダメかな」

露骨にイヤそうな顔をしたのが分かったんだろう。もうあんなニオイを嗅ぐのは2度とゴメンだ。

「けど間違いなく効果があるって希望が持てた。

本当はこの薬に関わるのはここまでだったんだけど、メドがつくまでは研究に関わることにしよう。残念だけど」

俺は最後のひと言が気になった。

「何が残念なんだ？ ニオイさえ無くなれば眼の治療に画期的な効果があるんだろ？」

「完成すればね。実際に一般の人に使えるまでには、そこに着くまで膨大なデータを集めなければならいんだけど」

「そりゃあ安全性を確かめないとイケないからな。当然だろう」

「ただ、ニオイに耐えられる人間はあまりいないんだ。

スプレーもできたことだし、少しはマシになるだろうけど」

「ま、まさか、そのためのデータ集めをお前が自分の体でやるのか！？」

これから何度もあのニオイを嗅がなければならないなんて……。

想像しただけで全身から冷や汗と脂汗が吹き出し、手がふるえた。

「しょうがないよ。オレのためでもあるんだから。」

薬の効果と効能を詳しく知るために必要だし、人間の代謝を知るために自分の身体を使っし後悔したって言ったよね。

ブラボーライト……。

古代ラテン語でブラヴォーは野蛮とか凶暴の意味があつた。

だけど、それが変化して勇敢や素晴らしいという意味に変化していったんだ。

化学兵器なんてものから、眼の特効薬にしてみせるよ。

光を蘇らせてくれる素晴らしい物の意味だね」

ニッコリ笑うその目は、よく見ると瞳孔が開きっぱなしだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4041k/>

---

53話 ブラボーライト

2011年1月13日07時25分発行